



海外林業協力における『能力』『関与』『共感』

指導普及・海外協力部長 稲本 龍生

最近の新聞に掲載された海外の識者の論説によると、他国へのアプローチには「能力」「関与」「共感」の3つの側面があるそうです。

「能力」は相手国にはない技術や知見やそれを移転・実行するための設備や財政支援、人的体制、「関与」は支援を約束し、人が出向いて関わること、「共感」は相手国の事情を理解することだそうです。

当センターは、ケニアにおいて20年以上続いたJICA社会林業プロジェクト(農民に対し、作物の間に木を植えて毎年の農業収入と伐期の木材収入を奨励し、樹木のある国土の面積比率を拡大)の終了後、農民が農地以外への植林により収入を得ることや、企業が造林に投資することを目的として、成長が速く市場で好まれる品種を開発するプロジェクトを実施してきました。社会林業から商業的林業を通じた森林面積拡大へ、しかも郷土樹種でというケニア政府の方針転換が育種プロの開始につながりました。自生種を商業ベースに乗せるには、野生個体からの改良と組織的な種苗供給が必要でした。

そこでは、日本における70年近くにわたる林木育種事業で培ったスギやヒノキの集団選抜技術＝「能力」を、ケニアの郷土樹種メリア(センダン科)やアカシア(マメ科)に適用すべく、遺伝的多様性の把握、選抜の基本となる集団の形成(精英樹の選定)、交配や選抜を行う試験地の造成、統計解析など必要な技術をケニアの森林研究機関へ移転してきました。

また「関与」として、やはりJICAの技術協力

プロジェクト＝相手国政府との国際約束のもとに活動を2期10年間継続することができました。また、伐期が15年程度と短いこともあって育種開始後7年で第2世代を選抜し、その成果をもって第3期プロジェクトを開始し、次世代に向け品種開発を継続しています。

このような枠組みの下、当センターには協力開始からずっと現地指導に携わっている研究者・技術者がいます。部署異動があっても自らのテーマとして関わり、或いは前任から引き継いで従事する人もいます。このような人的介入の継続も「関与」の重要な要素です。そこでは我々とケニア側との信頼が形成され、資金や機材目当てではなく、技術の確立を目指して不要なものは不要、失敗も隠さず次のステップに向け努力する姿勢が共有できています。

ただ、信頼関係があっても、事業は常に予定より遅れていきます。日本人のようにきちんと計画を立て、物事を運び計画を遵守する態度はあまりありません。あてにならない政府予算、急に変わるルール、乏しいインフラの中で詳細な計画は意味が薄いとケニア人は知っています。こうした事情を理解し、しかし相手に合わせるのではなく、手段を一つ一つ用意しながら、ゴールまでの逆算も示しつつ次のステップを促していく「共感」の繰り返しです。

海外担当としては、これら3要素のいずれが欠けても技術協力はうまくいかないと感じています。これからも効果の高いプロジェクトを目指し、努力を重ねていきたいと考えています。

【紙面紹介】

- コンテナ苗による集団林造成……………2
- エリートツリーの材質調査について……………3
- シラカンバ冬芽の越冬メカニズム……………4～5
- 特定母樹の指定・配布状況について……………6

- Webセミナー「薬用樹木の栽培と利用」を開催……………7
- 令和4年度林業研究・技術開発推進
関東・中部ブロック会議育種分科会と
関東地区特定母樹等普及促進会議等を開催 ほか
……………8



国立研究開発法人 森林研究・整備機構
森林総合研究所林木育種センター

Forest Tree Breeding Center, Forestry and Forest Products Research Institute